

序

大学教育における最大の醍醐味は、初めて本格的な研究にとりかかれることではないか。高等学校までは、既存の知識や技能を学び習い身につける学習に重点が置かれる。他方で大学においては、学習のみならず研究を行う機会も与えられる。ここで研究とは、社会にとって役に立つ新しい知識を生み出すことを目標とする活動のことをいう。よって、他人の研究の成果を学んだだけでは学習にはなっても研究にはならない。要するに、研究は、知の消費をしたうえで知の生産を目指すものなのである。

新たな知識という研究成果は論文としてまとめられる。論文は、学習成果をまとめたレポートとは異なる。論文には、「問い・主張・論拠」の三要素が必要不可欠である。まず、先行研究において未解決である問題が「問い」として設定されていなければならない。学問という用語に端的に表現されているとおり、学んで問うことが大切である。次に、問いに対する自らの答すなわち「主張」が提示されていなければならない。そして、事實的・理論的な根拠すなわち「論拠」でもって主張が裏付けられていなければならない。論文を作成するためには、問いの設定からその答の論証まで自ら考え抜く必要がある。

その考え抜く作業に不可欠なのが書くことである。なぜならば、人間の脳は、大量の情報を一度に処理する能力が低いからである。論文を書くということは、考えていることを可視化できる文字情報として記録していくことである。書いて推敲を重ねることによって、自分で考えていることの矛盾や説得力の欠如を修正しながら、体系的な思考を深めていくことができる。そのような知的格闘を経ない考えは、他人からの借り物であることが多い。論文執筆ほど能動的かつ創造的な知的活動はないのである。

知的共同体の中で営まれる研究という活動は、論文を公表して初めて完結する。個人研究といえども、個人的な知的好奇心を満たすだけでは十分でなく、自己の知的貢献を他者と共有することが求められる。卒論発表が

学部教育の総決算と位置付けられる所以である。ただ、卒論発表の多くは研究会内の報告で終わってしまうのが実情である。

『政治学研究』の存在意義は、学部レベルの論文を研究会の枠を超えて発表できるところにある。また、三田メディアセンターに印刷物として所蔵されることにより本塾の知的資産として保存されることにも留意すべきであろう。『政治学研究』に論文を掲載することは、単なる思い出作り以上の価値がある。本号では、政治思想から国際政治まで多様なテーマの卒業論文が掲載されている。一人でも多くの人に、学部4年生たちによる知的格闘の成果を堪能していただきたいものである。

本号の執筆者とゼミナール委員会の編集担当者のみなさん、このたびの出版、おめでとう。そして、慶應義塾大学法学部政治学科のよき伝統を受け継いでくれてありがとう。

2017年1月20日

法学部教授・政治学科学習指導
宮岡 勲

目次

序	宮岡 勲	i
戦時体制下における動物園の運営に関する一考察	荒川 智史	1
ポスト冷戦時代のイギリスの中東政策の変容		
—「価値」に基づく外交の限界	今井 潤	31
幼年絵雑誌『コドモノクニ』にみる戦時思想		
—満州事変以降に着目して	内田 葵	59
日米韓安全保障協力の進展と米国の関与		
—2012-2015年	大野 駿	87
1979年の北京の春における政治的要求についての考察		
—当時の地下出版物を中心に	金牧 功大	111
地域性の高い暴力的非国家主体と紛争解決		
—オスロ合意（1993）を事例として	佐藤 志織	137
近代日本における「漫画映画」の受容と展開	丹伊田 珠里	159
キャバレーの芸術性と風刺性	早坂 若子	187
開放的アナキーとしての破綻国家に対する軍事介入		
—レバノン内戦におけるシリアとイスラエルの侵攻		
	矢吹 弘孝	217
ブリティッシュ・ファシズムへの服従		
—変容するイギリス社会におけるモーズリーとニコルソン		
	山本 みずき	243
2016年度 政治学科ゼミナール委員会活動報告		265